

不知火海・球磨川流域圏学会ニュースレター

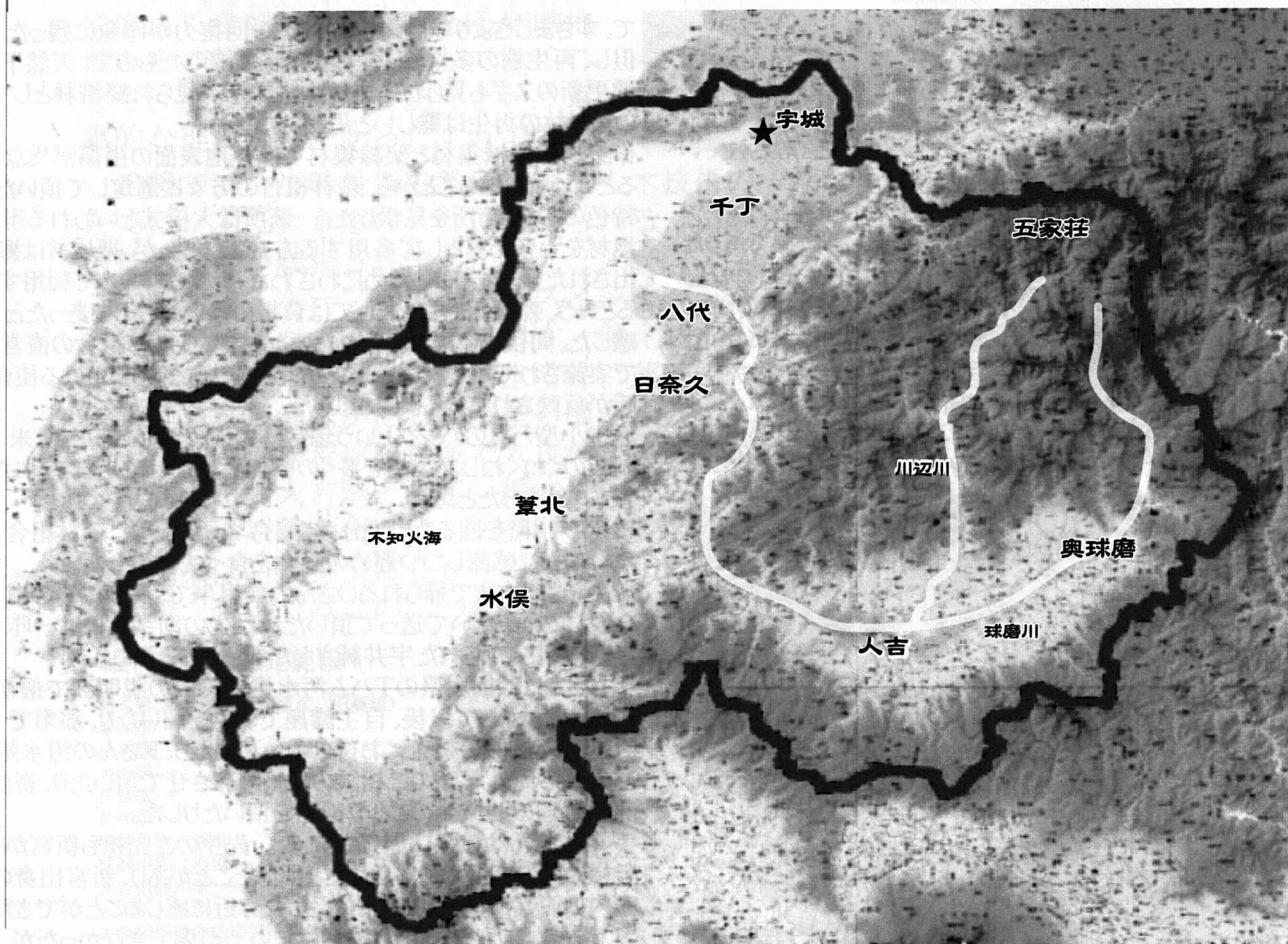
2008年5月発行

しらぬい くま

第4号

目次

- 現地見学会報告
- 流域ニュース
- 会員自己紹介
- 平成20年度総会ご案内



流域圏図：不知火海に注ぐ一級河川は球磨川だけです

事務局

TEL&FAX: **0964-26-2003**

熊本県下益城郡城南町東阿高1136-6

現地見学会報告—「流域圏の森の現状を見る見学会」報告

井上祥一郎（技術市民）

直前に当学会が後援に名を連ねた「第8回九州森林フォーラム in 球磨」が同じ球磨村で開催されたので、「流域環境修復実学」を専門と自称し勝手に「技術市民」を名乗る小生は、宮崎県都城の独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構九州沖縄農業研究センターにも所用があることを幸いに12日～14日の3日間、両方の行事に愛知県名古屋市から参加した。

球磨地方は遠いと感じられる方の参考までに、今回の小生の往路の足跡をご紹介します。

名古屋で夜8時に熊本バスセンター行き長距離夜行バスに乗れば、翌朝7時半には終点に到着する。今回は都城に先行するため手前の熊本県庁前で下車し、宮崎行きの特急バスに乗り継いで都城北バス停で下車。所用を済ませて同バス停から高速道人吉インターチェンジバス停へ、タクシーで数分のJR人吉駅に行き肥薩線に乗り、宿泊場所一勝地温泉「かわせみ」へ一勝地駅から15分歩いて16時頃到着。

10月14日朝8時30分「流域圏の森の現状を見る見学会」球泉洞駐車場に集合。球泉洞は日本の代表的な鍾乳洞で、球磨村森林組合が観光施設として経営管理されている。

天候は曇り時々晴れ間がみえる。下り坂の予報だが雨の落ちてくる心配はなし。若干秋らしさを感じる気温であった。今回の参加者は社会人10名、学生1名、小学生3名の14名。参加者のうち5名が現地に前泊。内4人は村営のかわせみ温泉泊。但し夕飯は役員会の時間の関係で水俣市内で取ったので、簡単な酒宴だけで就寝。

いよいよ本番の見学であるが、球磨村森林組合さんのご好意で小型バスと乗用車が用意されており、2名の森林組合の職員の方が日曜日にもかかわらず案内役を引き受けて下さった



球泉洞



山崩れ

見学先は大面積皆伐地と林道整備の現場。

大面積皆伐地は再造林未済地が特に問題になっており、降雨後に清流球磨川の濁りが継続する原因になっていると報じられてもいる（熊本日日新聞10月12日付朝刊第一面4段抜き記事—未植栽地大規模 崩落—）。今回案内していただいた皆伐の現場は、一年から数年経過をしており、集材方法も地表に多くの傷を残す方法以外の架線集材がされたこともあって、すさまじさより球磨地方の自然の回復力が印象に残った。但し、再生樹の多くは照葉樹が萌芽更新したもので、天然下種更新のスギも見られるが、幹に傷が多く見られ経済林としてのスギ林の再生は難しいと思われた。

作業道は機械集材と架線集材では林地表面の損傷が異なるといわれていることから、森林組合の方々に選定して頂いた特色のある3箇所を見学した。一箇所は大橋式といわれる現地材を土留め材として多用する方式であったが、既に材は搬出された後でありこのためにわざわざ市場で購入して利用するという、森林組合さんとしては負担の多い道作りであったと感じた。間伐を進めるために必要な林道を、森林組合の直営で実施されている現場も見たが、現地の森づくりにかける使命感が反映されているように思った。

途中小型バスのパンクという想定外の出来事もあったが、未舗装のくねくねした山道を多くの参加者を乗せて走ってくれた証左でもあったと思う。

予定の12時を回る約30分強、集合場所に帰着。森林組合のお二人に感謝しつつ遅めの昼食を食べて散会した。

散会后、熊本まで帰られるOさんの乗用車で、海岸沿いの道を選んでいただいて送って頂いた。Oさんの助手席には一昨年、昨年亡くなられた宇井純さんが乗られたとのこと。

宇井さんには栃木県のTハム污水处理施設の説明会で最初にお目にかかって以後、自主講座でお話を聞いたり、那須で污水处理施設の調査にお付き合い頂いたり、Kさんの污水处理方式の海外戦略のご相談の場に同席させて頂いたり、畜産廃水処理の助成金のごことで電話を頂いたりした。

宇井さんが元は和歌山県新宮に多く、先生のご先祖も新宮から殿様に付いて栃木に移られたと聞いたことがあり、新宮出身の家内の旧姓が同姓のことから、大変身近に感じる事ができた方であった。通夜、葬儀には沖縄にいて出席できなかったが、沖縄の新聞に先生の足跡が大きく掲載されていた。今回の助手席の話題も何かのご縁であった。

自然観察会にいらしてください

安達真由美 八代市役所環境課（水産技師）

世の中『環境』の時代。地球温暖化やエネルギーをはじめとする環境問題は今や「待ったなし」の状況です。そんな今、私が携わっている仕事はまさに「環境」です。自治体職員として環境課に勤務しており、自然体験型の環境教育に力を入れています。私が勤務する八代市には一級河川の球磨川が流れ込む八代海とそこに広がる干潟があり、山間部は平家の落人伝説の残る九州の秘境「五家荘」、それから第一次産業も盛んで、トマト、い草、柑橘類、アサリ、青海苔などが有名です。本市では、豊かな自然を生かした環境教育を行っています。春。生命の誕生の時期には「干潟観察会」、5月下旬には「ホタル鑑賞会」、子ども達の夏休みには「スターウォッチング」、「カヌー教室」、「田んぼの生き物調査」、秋。爽やかな風に吹かれながら「里山ウォークラリー」、冬。世界中から八代の広大な干潟へやってくる「球磨川河口の野鳥観察会」その他にも「植林」、「キノコの駒打ち体験」、「エコキッチン」、「七草採り」、「海洋清掃船への体験乗船」等々。市民の方々が楽しんで自然に触れてもらえる企画を練り、毎回好評の声をいただいています。



はっぱ観察会



干潟観察会

対象は子どもとその家族や友人がメインですが、最近では退職後のご夫婦の参加も増え、世代間交流の場にもなっています。また、本市の環境教育の特徴は地域の方々と一緒になった活動を進めていることです。各種観察会には、地元の市民環境団体、野鳥愛好会、植物友の会、自然観察会、婦人会の皆さんが講師として参加してもらっています。

今後さらに、地域全体で「環境に配慮できるひとづくり」「自然の素晴らしさを感じる心」を育てていく活動ができればと思います。旧来の行政主導ではなく、地域の人々が中心となり、その活動のサポートや情報提供、コーディネーター役を出来ればいいなと思っている今日この頃です。みなさんもぜひ八代へ遊びにいらして下さい。

天然アユの遡上量と温暖化

つる 詳子（環境カウンセラー）

今年も3月12日より、球磨川のアユの放流事業が始まった。今年の遡上漁は昨年に比べると多いようである。しかし、ここ数年球磨川のアユ遡上量は激減している。ここ10年ほどは、300万尾前後の遡上量を推移し、平成12年には500万尾を超える遡上があったものの、平成13年の304万尾を境に、277万、124万、146万、214万、82万と減少の一途を辿り、去年はとうとう48万尾まで落ちた。荒瀬ダムが出来たのは50年前なので、ダムだけではここ10年の激減は説明がつかない。ここ2～3年続く球磨川の濁水。落ち鮎の季節に大水が出ない。カワウや外来魚の増加・・・などいろいろな原因は頭に浮かぶ。球磨川漁協も産卵場の造成やカワウの追い出し作戦等講じているものの、アユの遡上量増加には結びついていない。そんな折、市民団体が「たかはし河川生物調査事務所」の高橋勇夫氏を呼んで講演会を企画した。高橋氏は、物部川、矢作川、天竜川など天然鮎を取り戻そうと努力をしている漁協を専門的な助言を行っている鮎の研究者である。

高橋氏の調査ではアユの遡上量減少は全国的な傾向であるという。原因はいろいろ考えられるが、高橋氏は孵化時期の遅れと遡上量の関係に着目して調査をされている。孵化のピークは95年頃から遅れ始め、早かった92年10月中旬からすると一番遅い時には2ヶ月の開きがあるということである。しかも、早く生まれ仔魚はその殆どが海に下りた段階で死んでいると高橋氏は指摘する。12月に孵化のピークが見られた年の仔魚もやはり死んでいるようである。アユの仔魚は水温20℃くらいで死ぬ割合が高くなるので、80年代からの海水温を調べてみると、基本的に上昇傾向にあり、頻りに高い水温が観測されるようになり、特に、96年は海水温が高く、20年間で最高値であったとのこと。実際、近年は西日本でアユが採れる割合が減少、東日本では増加の傾向にあり、温暖化の影響は無視できないということである。

実際、不知火海の海水温上昇については、漁業者も「海苔の種付けができない」「青海苔採捕の最盛期が遅れている」「数年前は見なかった南方系の生物が頻りに見られる」等、肌で感じている。温暖化の影響が、ここ10年間という短期間で目に見える速度で現れていることを考えると、恐ろしいものがある。親アユには、仔魚の海での生存率をできるだけ高めるために、その年の海水温を予知し、産卵の時期をずらす能力があるのかもしれない。それでも早生まれの鮎は、死んでいるのだろう。

今不知火海を初め球磨川流域の再生を願うなら、地球規模で法的な整備を求めていくしかない。一人一人の行動が世界に広がるのを待っている余裕もないのではないかと実感している。また、アユは川だけではなく、流域及び地球環境の健全度を測るバロメータであることを考えると、天然アユを増やす試みを、漁協だけに任せておいて良いはずもない。

ともあれ、気持ちだけは焦るものの、今年の球磨川のアユ遡上量が去年より増加することを願い、「今日の遡上量はどうでした?」と毎日確認する、神頼みの日々である。

肥薩線は、来年100周年!

久保田 貴紀 かつあデザイン一級建築士事務所代表
／多良木町文化財保護委員

平成19年11月、JR肥薩線の13施設が経済産業省の「近代化産業遺産」に選ばれました。同線の「山線」(人吉-吉松間)は、全国の縦貫鉄道で最後の区間として明治42年(1909)に開通し、当初は鹿児島本線として多くの重量貨物列車が往来していました。昭和2年(1927)開通の海岸ルートよりも事業が先行したのは、関門海峡の封鎖に備えて食糧補給基地である球磨地域からの物流経路を確保しておくことや、敵の艦砲射撃を防ぐという軍事的な理由からであったようです。



沿線では、当時最新の鉄道技術や土木技術の一端を垣間見ることができます。特に、現在では日本三大車窓の一つに数えられる「山線」は、前代未聞の山岳鉄道工事で当時の鉄道技術の粋が結集されました。

大畑駅は、ループ線の途中にスイッチバックを併せ持つ日本唯一の駅で、周辺には開業当時の施設跡がよく残っています。例えば、人吉方面から登ってきた蒸気機関車に給水するための円形平面の石造の給水塔や、運転士や乗客が煤煙で汚れた顔を洗うためにホームに設けられた湧水が出る朝顔型の噴水など。

矢岳駅は、人吉球磨地域で大規模なロケが行われた映画「北辰斜にさすところ」の劇中では戦時中の人吉駅として、構内に保存されているD51とともに登場しています。

また、「川線」(八代-人吉間)の明治41年(1908)に架設された球磨川第一・第二橋梁は、橋脚上に60°の斜角がついた「トランケート(切り詰め式)」と呼ばれる鉄橋で、全国ではこの二つしか残っていないと言われています。

近代化遺産認定施設

熊本県 物資輸送関連遺産(肥薩線)

- 坂本駅 -
- 白石駅 -
- 大畑駅 -
- 矢岳駅 -
- 真幸駅 -
- 球磨川第一橋梁 -
- 球磨川第二橋梁 -
- 人吉機関庫 -
- 人吉駅一番ホームの古レール -
- 大畑駅周辺の鉄道施設遺産群 -
- 大畑駅 石造りの給水塔 -
- 大畑駅 朝顔型噴水 -
- 矢岳駅「SL展示館」の保存車両 蒸気機関車D51170
- 矢岳第一トンネル 扇額
- 湧水町に残るアーチ煉瓦暗渠 -
- 吉松駅横の石倉(燃料庫) -
- 吉松駅前の保存車両 蒸気機関車「C5552号」
- 大隅横川駅 -
- 始良郡湧水町嘉例川駅 -

さらに、人吉駅には、その後人吉球磨地域に数多く造られる石倉のルーツとも言える明治44年(1911)建築の石造の機関庫や、転車台(ターンテーブル)が残っています。

近代日本を陰で支えた産業路線であったJR肥薩線は、平成21年11月21日に開通100周年を迎えます。熊本-人吉間における58654号機(SLあそボーイとして活躍した最高齢SL)の運行も決まり、観光路線として新たな期待が寄せられています。

どんな学会ですか？ どんな人が会員ですか？

みなさんの要望にこたえ、数人の方に自己紹介してもらいました。
さて、どんな学会像が見えてきますか？

●歌岡 宏信(かおかひろのぶ) NPO法人水と緑いきものネットワークくまもと理事長

ネズミ・コウモリからシカ・カモシカまで、哺乳類について調べています。NPOでは、森に暮らすムササビをシンボルに、奥山から里山まで森がつながる「緑の回廊づくり」をめざして、夜間のムササビ観察会などの活動をしています。球磨川流域圏では、市房神社は素晴らしいムササビ観察ポイントですね。ところが神社周辺にある自然林をはじめとして、球磨川流域圏の森ではシカが異常に増え、森が荒れ始めています。そんな森の再生にどう関わっていくか、私にとってこれからの課題です。

●安達 真由美 八代市役所環境課(水産技師)

球磨川が八代海へそそぐ河口に位置する八代市。熊本県の第2の都市です。ここは、農林水産業、干潟、温泉、美味しい食べ物、飲み屋、穏和な人々・・・素敵な物で溢れています。現在は、学生の頃から学んできた環境分野の仕事をしています。特に水産業や海洋環境に興味を持っており、仕事外でも様々なフィールドワークをしています。みなさんもぜひ八代へお越し下さいね。ご案内いたします♪

●柳原 哲郎 新聞社・営業

人吉に生まれたこともあって、小さい頃から川遊びが好きでした。今でもカヌーやキャンプで、時々球磨川や川辺川に出かけています。単に河川のみのごととして把握するのではなく、「流域圏」として、山のことも川のこと、人間の営みも含めて考えていこうという本学会の取り組みは、今までにない質の実践的な取り組みが生まれてくるのではないかと期待しています。

●上淵 徳光 会社役員

新緑の山へ行こう 花々や新緑が1日と山野を飾り始めた。ウツギ、山アジサイが川原や山道を彩る。広葉樹林はそれぞれの木が黄を緑を化粧し、精一杯自己主張をして芽吹く、豪勢なシイやミズメ達が彩りを重ね、カケス、ルリ、三光鳥らの野鳥に賑やかに唄わせて全山を飾る。痛んだ自然にも限りなき命の息吹が目をも楽しませ、心を弾ませてくれる。たまには谷の清水に手を浸し、鳥の囀りに戯れ奥山の若葉の風に深呼吸しよう。

●重松 貴子 ラフティングガイド

通常は会社員をしています。夏場の土日だけ球磨川でラフティングガイド(ゴムボートでの激流下りのインストラクター)をしています。お客さんとしてラフティングを始めて経験したとき、都会にはない川の美しさに惹かれとうとうガイドになりました。また最近では興味の領域が川から派生し、歴史や自然環境そして海などへ広がっています。地元で詳しい方々からのお話を聞けることを楽しみにしています。

●大塚 勝海 雑誌社・編集

熊本市で県内中心の経済誌の編集をしています。大学、大学院は関東で過ごし、専攻は環境経済学。出身が人吉市という関係もあり、川辺川ダムや水俣病問題について学んできました。学会には生活者の視点に立った考察・行動に期待しています。

— 学会誌第2巻第1号が完成いたしました —

生まれたばかりの不知火海・球磨川流域圏学会も、学会誌第2巻第1号を発行できました。19年度学会員の方には、発送いたしておりますが、一般として購入される方には、一部1000円にて販売いたしております。また、第1巻第1号には全国の各方面から購入の申し込みがございましたが、まだ若干の在庫があります。ご希望の方は、お早めにお問い合わせください。不知火海・球磨川流域圏学会では、学会員を募集いたしております。より多くの方に仲間に加わっていただき、盛んな交流を行って参りましょう。

連絡先(学会事務局):熊本県下益城郡城南町東阿高1136-6(佐藤伸二方)

TEL/FAX:0964-26-2003 crane938@yahoo.co.jp(つる方) 年会費:3000円



平成20年度 不知火海・球磨川流域圏学会 総会ご案内

会場：宇城市不知火公民館小ホール

宇城市不知火町高良2273-1 電話：0964-32-0277

平成20年6月14日(土曜) 12:00～13:50 総会

(受付 11:30～)

14:00～17:30 研究発表会

(受付 13:3～)

○基調講演 講演者：斉藤万芳氏（三角西港の文化・文学を考える会）
演題：「世界遺産を目指す三角西港」

○研究発表

- ①佐藤 伸二（崇城大学非常勤講師）「三角西港を築った石工たち」
- ②坂本 順三（松合町並み保存会会長）「土蔵白壁を活かした町づくり」
- ③坂梨 仁彦（県立博物館プロジェクト班）
「熊本市及びその周辺域におけるカラス類二種の営巣環境選択性」
- ④堤 裕昭（熊本県立大学環境共生学部教授）
「熊本県八代市金剛干拓地先の干潟に生息するアサリの個体群動態と環境変動の関係」
- ⑤石原 浩（八代私立博物館学芸員）「天草の仁王像について」
- ⑥福田 興次（福田農場代表取締役）「雨になった気持ちで」

○参加費 学会員500円 一般1000円

18:00～20:00 懇親会

○参加費 4000円 場所：どんこ船松橋店 電話：0964-33-6321

平成20年6月15日(日曜) 8:30～14:30 現地見学会

「三角西港、松合の白壁土蔵見学」

—現存する港湾近代化遺産・三角西港と松合の歴史地区を見学します。
スナメリを観察できるおまけつき。

8:20 (JR松橋駅集合)
8:30 総会会場駐車場 集合
8:50 松合
11:00 三角西港
12:00 昼食
13:00 スナメリウォッチング後 解散

○参加費 500円

■不知火海・球磨川流域圏学会ニューズレター第4号
編集・発行/不知火海・球磨川流域圏学会

■編集委員会

委員長/蔵治光一郎 委員/新井祥穂・住吉献太郎・高木正博・前田一洋・村上雅博
ニューズレター編集/久保田貴紀・吉本博明・重松貴子